

校長室から

校長室だより 第3号
令和2(2020)年6月1日発行
文責 宮城県古川工業高等学校
校長 佐藤 誠



新年度が始まり、4月初めに始業式と入学式を実施したものの、その後何回かの登校機会はありませんでしたが、4月・5月の2ヶ月間、3月も含めれば3ヶ月間もの、生徒の皆さんのみならず教職員としての我々ですら、今まで経験したことのないほど長期にわたる学校の臨時休業が続きました。

県内では4月28日以降、1ヶ月以上にわたり新たな感染者が出ていないこともあり、本日から本格的に学校が再開されることになりました。県教育委員会では、今までの外出の自粛や行事等の制限を緩和して、段階的に活動のレベルを引き上げていくために、7月31日までを移行期間としました。約3週間を区切りとして、まず5月31日(日)までを「ステップ0」、本日6月1日(月)から18日(木)までは「ステップ①」、6月19日(金)から7月9日(木)までを「ステップ②」、最終7月10日(金)から31日(金)までを「ステップ③」と設定し、各活動における実施可能なレベルの目安を提示しています。

本日の放送による講話で、①感染防止対策、②学習、③部活動、④あいさつ、の4点をお話しましたので、ここではさらに付け加える形で、部活動と進路について述べたいと思います。

〇部活動の今後の見通し

学校再開、授業再開にあわせ、本日から部活動も再開できることとなった。ただし、上記のような活動再開のスケジュールにより、活動可能な内容が段階的となっている。講話でもお話ししたとおり、まず「ステップ①」の本日から6月18日(木)では校内での活動、「ステップ②」の6月19日(金)から7月9日(木)までは宿泊を伴わなければ県内外への練習試合・合同練習が可能、「ステップ③」の7月10日(金)以降は各種大会等への参加も可能、となっている。

本校では、今週の部活動については、長い自主練習の期間があったことから、放課後2時間程度の練習活動として、準備・片づけ等を含めて遅くとも18時30分を目安に下校することとしている。また、当初の年間行事計画では6月18日から前期中間考査の予定となっていたが、すでに行事の組み替えによって7月始めに日程を移動して考査を実施することに決定している。本来は、考査前1週間から考査終了までは部活動停止としているが、7月10日以降に大会等への参加も可能とされていることを考えると、せっかく再開してすぐまた活動停止では身体もペースも作れないことが想像されるため、考査期間であっても、必要に応じて部活動は活動停止としないようこれから検討していきたい。

県高体連では、各競技専門部に県総体に代わる代替大会の開催について検討するよう依頼している。先日の新聞報道では、屋外競技は概ね前向きだが、屋内競技は会場確保等を含め課題が多い、という内容であった。また、県高野連も、甲子園県予選の代替となる大会の開催を模索している。それぞれの競技によって差はあるだろうが、もし大会開催が実現するならば、自分を試す機会として前向きに取り組んでみて欲しい。

先日、県高体連からの要請に応じて、元高校教諭・県立学校長で、日本が参加をボイコットして幻となったモスクワ・オリンピックのフェンシング競技日本代表である千田健一先生から、自らの経験をもとにして、各種大会が中止となってしまった高校生の皆さんに対するメッセージが寄せられた。メッセージ文はすでに各HRで配付され、目にしたことと思う。

千田先生自身の選手としての競技歴と指導者としての実績も掲載されてあったと思うが、千田先生が教員として最初に勤務された県立の女子校である県が浦(かなえがうら)高校に、私自身も初任の教員として配属され、千田先生とは6年間一緒に勤務した。千田先生は地理専門、私は世界史専門の同じ社会科の教員として、また同じ学年のクラス担任として3年間持ち上がりで卒業生を出すという共通の時間を過ごすことができた。その中での一番の思い出は、平成2年インターハイが宮城県で開催された際、フェンシング競技は本吉町体育館(現気仙沼市)が会場で、県が浦高校は見事に団体優勝を飾るのだが、その年度は千田先生も自分も3学年を担当しており、自分のクラスにはフェンシングの主将はじめ部員が複数いて、他の生徒も会場に詰めかけ地元大応援団として団体優勝の感動の瞬間を一緒になって経験することができたことである。もっとも、その時には自分は仙台のソフトテニス会場で審判をしていたのだが。

千田先生は、学校の中ではほとんどモスクワオリンピックの話はしたことがない。自分の中での整理をずっと続けていたのだと思う。でも、その自分が果たせなかった思いを、指導者として教え子に託し、県が浦高校からは菅原智恵子選手、気仙沼高校では息子でもある千田健太選手の2名のオリンピック選手を育て上げたのである。ぜひもう一度、千田先生のメッセージを読んでみて欲しい。

○進路について考える（その2）

本日の講話で、「あいさつ」を大切にしたいと話した。企業が求める人材について、前回の「校長室だより」で紹介したが、そのうちの「コミュニケーション能力」の基本は、しっかりとあいさつができることである。あいさつを交わすことは、他者との共同作業や対話をする第一歩である。

アメリカの心理学者アルバート・メラビアンが提唱した、人の「第一印象」に関する「メラビアンの法則」というものがある。それによれば、人と話をする際に相手に伝わる情報に占める割合として、身なりやしぐさなど見た目の「視覚情報が55%」、声の大きさやトーンなど「聴覚情報が38%」、そして話の内容である「言語情報が7%」だそうで、これは「7-38-55のルール」とも呼ばれる。

この法則に基づけば、話しているときの印象で一番相手に伝わるのは、見た目から受ける視覚情報が大半で、相手に与える印象としてまず一番先に入ってくるのが視覚情報だということになる。つまり、まず見た目の印象を良くしておくことで、これから自分が話すことに耳を傾けてもらいやすくなり、身なりをきちんと整えたり美しいしぐさを心がけることは、自分が訴えたいことを相手に伝える第一の手段であることがわかる。

さて実際に、生徒の皆さんが関わる進路の場面に当てはめてみると、本校では全日制は男女とも制服があるから、自分の制服を美しく着こなすことで服装に関する見た目は大丈夫だと思う。あとは髪を整えるくらいか。さらに、歩き方やお辞儀の仕方、しぐさなどの動作も、第一印象に占める割合は大きい。なめらかで自然な立ち居振る舞いや、きびきびした動作は、その人の自信を感じさせるし、安心感を与えるものだ。ただ、歩き方やお辞儀の仕方は、それなりに意識して繰り返していかないと急に変えることはできないものなので、日頃から家族や友人など他の人に見てもらい、少しずつ美しくしていく努力が必要になるので、特に就職・進学を控える3年生・4年生は取り組んでみて欲しい。

それに加えて、「あいさつ」である。声の大きさやトーンなど、しっかりとした「あいさつ」で好印象をプラスし、自分の良さをアピールできるようにして欲しい。なお、いろいろな考え方があると思うが、自分では、先にあいさつの言葉を言い、その後にお辞儀するというやり方、いわゆる「分離礼」がより美しく、生徒の皆さんにも身につけて欲しいやり方だと考えている。

もう一つ、「ハロー効果」についても紹介しておきたい。ある特徴が強いことで、その印象に引きずられて別の部分の印象も変化してしまう心理的効果をハロー効果という。これにはプラスの効果とマイナスの効果の両方があり、たとえば、良い部分が目立つ人はその他の部分も好印象に見え、逆に悪い部分が目立つ人はその他の部分の印象も悪くしてしまう、ということだ。

外部の方から、本校生徒のあいさつが素晴らしい、と褒められるのは、プラスのハロー効果があるのかも知れない。また、自転車の乗り方が悪いだとか、女子生徒のスカートが短い、などは、マイナスのハロー効果を生み出しているかも知れない。だから、特に学校の外にあっては、「古川工業高校の制服を着た高校生」を見た人は、その場面の中では「古川工業高校の生徒全体」の代表として見ていることに想像力をめぐらせ、行動して欲しいと思う。一人ひとりがプラスのハロー効果を生み出し、学校全体がもっと盛り上げられるよう期待しています。

最後に、学校が再開して授業や部活動や友人との活動が楽しくて仕方ない人も多くいると思います。くれぐれも、張り切りすぎないようにしてください。今までの2ヶ月・3ヶ月間はあまりにも長い。突然、全開モードで行こうとしても、身体も気持ちもついて行くのが難しいかも知れません。無理せず、徐々に馴らしていくことが大切です。

また、この臨時休業期間中に、卒業生がお世話になっている企業や有志個人の方から、生徒諸君に使って欲しいと「マスク」を寄贈していただきました。心から感謝申し上げますとともに、生徒の皆さんにも紹介しておきます。寄贈いただいた企業・個人は次のとおりです。「力丸建設」様、「アイリスオーヤマ」様、「富士電機株式会社東京工場」様、匿名個人様。誠にありがとうございました。